『三輪 白式神神楽』 上演詞章

詞章

1

【名ノリ笛】
〈名ノリ〉
ワキ「これは和州三輪の山蔭に住まひする玄賓僧都にて候、ここにいづくともなく知らぬ女性、毎日樒閼伽の水を持ちて来たり候、今日も来たりて候はば、住みかを尋ねばやと思ひ候

2

【次第】
〈次第〉
シテへ三輪の山もと道もなし、三輪の山もと道もなし、松原の奥を尋ねん
〈サシ〉
シテへげにや老少不定とて、世のなかなかに身は残り、いく春秋をか送りけん、あさましやなすことなくていたづらに、憂き年月を三輪の里に、住まひする女にて候「またこの山蔭に玄賓僧都とて、尊き人のおん入り候ふほどに、いつも樒閼伽の水を汲みて参らせ候、今日もまた参らばやと思ひ候

3

〈掛ケ合〉
ワキへ山頭には夜孤輪の月を戴き、洞口には朝一片の雲を吐く、山田守る僧都の身こそ悲しけれ、秋果てぬれば、訪ふ人もなし
〈問答〉
シテ「いかにこの庵室のうちへ案内申し候はん
ワキ「案内申さんとは、またいつも樒閼伽の水持ちて来たれる人か
シテへ山影門に入つて推せども出でず
ワキへ月光地に舗いて掃へどもまた生ず
シテ、ワキへ鳥声とこしなへにして、老生と静かなる山居
〈歌〉
地へ柴の編み戸を押し開き、かくしも尋ね切樒、罪を助けてたびたまへ
〈上ゲ歌〉
地へ秋寒き窓のうち、秋寒き窓のうち、軒の松風うちしぐれ、木の葉かき敷く庭の面、門は葎や閉ぢつらん、下樋の水音も、苔に聞こえて静かなる、この山住みぞ淋しき

4

〈問答〉
シテ「いかに上人に申すべきことの候
ワキ「なにごとにて候ふぞ
シテ「秋も夜寒になり候へば、おん衣を一重たまはり候へ
ワキ「やすきあひだのこと、この衣を参らせ候
シテ「あらありがたや候、さらばおん暇申し候はん
ワキ「しばらく、このほど樒閼伽の水持ちて来たりたまふおん志、返す返すもありがたう候、さてさておん身はいづくに住みたまふぞ、住みかをおん明かし候へ
シテ「わらはが住みかは三輪の里、山もと近き所なり、その上わが庵は、三輪の山もと恋しくはと詠みたれども、何しにわれをば訪ひたまふべき、なほも不審に思し召さば　へ訪ひ来ませ
〈歌〉
地へ杉立てる門をしるしにて、尋ねたまへと言ひ捨てて、かき消すごとくに失せにけり

5

〔間の段―下段に概略〕

現代語訳

1 玄賓の登場

玄賓が登場し、不審な女が毎日樒と閼伽を持ってやって来るので、何者か訊ねようと言う。

玄賓　わたくしは大和の三輪山の麓に住んでいる玄賓僧都です。ここにどこの者とも知らぬ女性が、毎日、樒と仏に供える閼伽の水を携えてやってきます。今日も来たならば、その者の住みかを尋ねたいと思います。

2 里女の登場

一人の里女が無為の過去を悔いつつ、樒と閼伽の水を携えて玄賓のもとにやって来る。

女　この三輪山の麓は人が通る道とてありませんが、それでも松原を通って、その奥を尋ねることにしよう。
まことに老少不定の世の中ですが、そのならわしとは逆に、わたくしのような者がかえって長生きをしています。その結果、もうどれだけ長い年月を生きてきたことでしょうか。しかし、わたくしの場合、長生きをしたとはいっても、あさましいことに、その間、なにをなすでもなく、ただ意味もなく、憂きことばかりの年月を、この三輪の里で送ってきました。ところで、この山の麓に、玄賓僧都という高僧がおいでですので、毎日、樒と閼伽の水を汲んで、お届けしているのですが、今日もまたそれを持って上人のもとに参上しようと思います。

3 玄賓、里女の応対

里女は玄賓に案内を乞い、罪を助けてほしいと言いつつ、静寂そのものの庵室の内に招き入れられる。

玄賓　わたくしの住まいは、夜は山の頂に丸い月がぽっかりと浮かび、朝は洞窟の入り口から一片の雲が出る、そういうところにあります。また、わたくしは山田を守る案山子のようなもので、秋の収穫の季節が終われば、誰も尋ねて来る者もない、そういう孤独な境遇にあります。
女　もうし、この庵室のお僧におうかがい申します。
玄賓　案内を乞うのは、いつも樒と閼伽の水を携えておいでになる人でしょうか。
女　はい。それにしても、ある詩に「山の影が門の内に入りこんで、押し戻そうとしても動かない」と詠まれていますが、わたくしもその山影のようにここから戻らず、ぜひお目にかかりたく思います。
玄賓　その詩の続きは、「月光が地面に映って、いくら掃いても消えない」というものですが、その月光のように、お帰りにはならないおつもりのようですね。
山影と月光、それに鳥の声が絶えず聞こえてくる、静寂そのものの山家、女はその柴の網戸を押し開いて、「こうしてお尋ねしてきたのです。ぜひ、わたくしの罪をお助けください」と言って、庵室の内に入ってきた。秋の屋内は寒さを感じさせ、軒端に吹く松風はさながら時雨の音のように聞こえ、庭には木の葉が布を敷いたように散っている。門は雑草に覆われ、土中の樋の水音も苔の下から聞こえてくる。まことに寂しい山家のありさまである。

4 里女の中入

女は玄賓にこうて一枚の衣をたまわり、自分の住まいは三輪山麓の「杉立てる門」だと告げて、作り物に姿を消す。

女　もうし、お上人にお願いがございます。
玄賓　何事でしょうか。
女　秋も夜寒の時節になりましたので、おん衣を一枚いただきとうございます。
玄賓　たやすいこと。では、この衣をさしあげましょう。
女　これはありがたいことです。それではお暇を申します。
玄賓　ちょっとお待ちなさい。このほど、樒と閼伽の水を持っておいでになるお志、返す返すもありがたいことです。ところで、あなたはどこに住んでいらっしゃるのですか。住まいをお教えください。
女　私の住まいは三輪の里で、三輪山の麓の近くでございます。また、歌にも、「わが庵は三輪の山もと恋しくはとぶらひ来ませ杉立てる門」と詠まれていますが、わたくしの家はお訪ねくださるような所ではありません。しかし、それでもわたくしのことをご不審に思われるなら、「杉立てる門」を目印に、どうぞお訪ねください。
女はそう言い捨てて、かき消すように見えなくなってしまった。

5 里人、玄賓の応対

里人が山麓の杉に衣がかけられていることを玄賓に報告し、玄賓からそれまでの事情を聞いて退場。

〔里人が三輪明神の由来を述べつつ参詣すると、神木の一の杉の枝に玄賓の衣がかかっているのを見て、玄賓に報告する。玄賓が毎日樒と閼伽の水を届けにきた女に衣を与えたことを語ると、里人はその女こそ三輪明神で、衆生済度の恵みを受けるため、衣を所望したのであろうと言い、玄賓に、神前に行って、衣を見るよう勧める〕

6

〈上ゲ歌〉
ワキへこの草庵を立ち出でて、行けばほどなく三輪の里、近きあたりか山蔭の、松は常盤の色ぞかし、杉むらばかり立つなる、神垣はいづくなるらん、神垣はいづくなるらん

7

〈□〉
ワキへ不思議やなこれなる杉の下枝を見れば、ありつる女人に与へつる衣の掛かりたるぞや「寄りて見れば衣の褄に金色の文字据われり、読みて見れば歌なり
〈下ノ詠〉
ワキへ三つの輪は、清く浄きぞ唐衣、呉ると思ふな、取ると思はじ

8

〈上ノ詠〉
シテへ千早振る、神も願ひのあるゆゑに、人の値遇に、逢ふぞ嬉しき
〈掛ケ合〉
ワキへこれなる杉の木蔭より、妙なるみ声聞こえさせたまふぞや、同じくは末世の衆生の迷ひを照らし、おん姿を拝まれおはしませと、念願深き感涙に、墨の衣を濡らすぞや
シテへ恥づかしながらわが姿、上人にまみえ申すべし、罪を助けてたびたまへ

6 玄賓の待受

玄賓が三輪の里に赴く。

玄賓　この草庵をあとにして三輪の里に向かうと、まもなく三輪の里に着きました。明神はこの近くの山麓におわすのだろうか。しかし、目印のようなものはなく、杉林が続いているばかりです。明神のお社はどこなのだろうか。

7 玄賓の詠唱

玄賓はさいぜん女に与えた衣が杉の枝にかかっているのを見つけ、そこに記されている歌を読む。

玄賓　これは不思議だ。この杉の下枝を見れば、さきほど女に与えた衣がかかっているではないか。近づいてみると、衣の褄に金色の文字が記されている。見れば、歌です。なになに、「明神の神徳は清浄そのものゆえ、恵みを与えるとか与えられるとか、区別をしてはならない。それくらい三輪明神の神徳は自他の区別がない崇高なものである」とある。

8 三輪明神の登場、明神と玄賓の応対

三輪明神が杉の木蔭から女神姿で現われ、玄賓に衆生済度の方便として受けている苦しみから助けてほしいと訴える。

明神　神にも救済を願う心があるので、こうして尊いお僧にお会いすることができるのは嬉しいことです。
玄賓　この杉の木蔭から霊妙な明神のみ声が聞こえてきました。どうか、末世の衆生の迷ひを覚ましてくだされて、お姿をお見せください。
と、玄賓は深く祈念して、感涙で法衣を濡らすのだった。
明神　それでは、恥ずかしながら、わが姿を上人にお見せいたしましょう。どうかわが罪を助けていただきたいものです。

ワキへいや罪科は人間にあり、これは妙なる神道の
シテへ衆生済度の方便なるを
ワキへしばし迷ひの
シテへ人心や
〈上ゲ歌〉
地へ女姿と三輪の神、女姿と三輪の神、襷掛け帯引きかへて、ただ祝子が着するなる、烏帽子狩衣、裳裾の上に掛け、御影あらたに見えたまふ、かたじけなのおんことや

9

〈クリ〉
地へそれ神代の昔物語は、末代の衆生のため、済度方便のことわざ、品々もつて世のためなり
〈サシ〉
シテへ中にもこの敷島は、人敬つて神力増す
地へ五濁の塵に交はり、しばし心は足引きの、大和の国に年久しき夫婦の者あり、八千代をこめし玉椿、変はらぬ色を頼みけるに
〈クセ〉
地へされどもこの人、夜は来れども昼は見えず、ある夜の睦言に、おん身いかなるゆゑにより、かく年月を送る身の、昼をば何と烏羽玉の、夜ならで通ひたまはぬは、いと不審多きことなり、ただ同じくはとこしなへに、契りをこむべしとありしかば、かの人答へ言ふやう、げにも姿は羽束師の、洩りてよそにや知られなん、いまよりのちは通ふまじ、契りも今宵ばかりなりと、ねんごろに語れば、さすが別れの悲しさに、帰る所を知らんとて、苧環に針をつけ、裳裾にこれを綴じつけて、跡を控へて慕ひ行く
シテへまだ青柳の糸長く
地へ結ぶや早玉の、おのが力にささがにの、糸繰り返し行くほどに、この山もとの神垣や、杉の下枝に留まりたり、こはそもあさましや、契りし人の姿か、その糸の三輪残りしより、三輪のしるしの過ぎし世を、語るにつけて恥づかしや

玄賓　いやいや、罪科は人間にあるもの。あなたは尊い神明ではありませんか。
明神　ええ、神の罪は衆生済度の方便です。
玄賓　その方便として、しばし迷いの心をもっているのですね。
明神　はい、人間と同じように迷う心をもっているのでございます。それで女の姿となって現われたのでございます。

こうして、三輪明神が女姿で現われた。しかし、そのお姿は女神らしい襷と掛帯姿ではなく、裳裾の上に神官が着るという烏帽子・狩衣を着た姿で、あらたかなお姿を現わされた。まことにありがたいことである。

9　三輪明神の物語

三輪明神は神代における三輪明神の物語を語って、神が濁世の人間に交じわって衆生を救うことを示す。

明神　そもそも、神代の昔の物語はこの末世の衆生のためのもので、それは衆生済度の手だてであって、種々あるその物語はひとえにそのためなのです。

とりわけ、この国においては、人が神を敬うことによって神はいっそうその威力を増すのです。そこで、この国では、神はこの濁世に交わって、しばし人間と同じように心を迷わせるのです。

さて、昔、この大和の国に長年ともに暮らした夫婦の者がありました。二人はいつまでも永遠に変わらぬ思いをもって暮らしていました。

しかし、この男は、夜にはやって来るものの、昼間は姿を見せることがありませんでした。ある夜の睦言のなかで、女が、「あなたはなにゆえ、このように長年暮らしているのに、昼間を嫌って、夜だけ通ってお出でになるのでしょうか。たいへん不審なことです。同じことなら、昼夜を問わずお出でいただきたいものです」と言うと、男は「お前の言うことはもっともだ。しかし、わたしはじつは恥ずかしい姿をしているので、昼間通ってきたならば、それを人に知られてしまうだろう。だから、これからはここに通うのをやめたいと思う。こうしてあい逢うのも今宵かぎりだ」と、しみじみと言うのでした。そこで、女はさすがに別れを悲しく思って、男がどこに帰るのかを知ろうと思って、苧環の糸の先に針をつけ、その針を男の裳裾に綴じつけ、その糸をめあてに苧環を手に男のあとを追って行ったのです。

はじめのうちは、たぐる糸もまだ長かったのですが、蜘蛛が巣をかけるように、自力で繰り返し糸をたぐってゆくと、この山麓の神域の杉の木の下で糸は終わっていました。女は、「これはなんとしたことでしょうか。これが契りを結んだ人だったのか」と驚いたのです。その苧環の糸が三輪残っていたので、その杉を三輪のしるしの杉と呼ぶようになったのですが、こんな昔のことを語るのは恥ずかしいかぎりです。

10

〈ロンギ〉
地へげにありがたきご相好、聞くにつけても法の道、なほしも頼む心かな
シテへとても神代の物語、くはしくいざや現はし、かの上人を慰めん
地へまづは岩戸のそのはじめ、隠れし神を出ださんとて、八百万の神遊び、これぞ神楽のはじめなる
〈詠〉
シテへ千早振る

10　三輪明神の舞

三輪明神は神代の物語の続きとして、弊を手に、天の岩戸での神たちの神遊を再現して玄賓に見せる。

玄賓　まことにありがたい神のお姿です。また、このような物語を聞くにつけても、いっそう神仏に帰依する気持ちが強くなります。
明神　それでは、神代の物語をくわしくお目にかけて、お上人をお慰めすることにいたしましょう。

まずは、その昔、天照大神が岩戸にお隠れになった時、大神を外に出そうとして多くの神たちが神遊びをした、そのありさまをお目にかけましょう。これが神楽のはじまりなのです。さあ、袖をひるがえして、岩戸での神遊びのさまを再現しましょう。

《三輪明神は神代の神遊びを再現して舞う》

11

〈クリ〉
シテへ天の岩戸を引き立てて
地へ神は跡なく入りたまへば、常闇の世とはやなりぬ
〈□〉
シテへ八百万の神たち、岩戸の前にてこれを嘆き、神楽を奏して舞ひたまへば
〈ノリ地〉
地へ天照大神、その時に岩戸を、少し開きたまへば
〈□〉
地へまた常闇の雲晴れて、日月光り輝けば、人の面白々と見ゆる
〈ノリ地〉
シテへ面白やと、神のみ声の
地へ妙なるはじめの、物語
〈歌〉
地へ思へば伊勢と三輪の神、思へば伊勢と三輪の神、一体分身のおんこと、いまさらなにと磐座や、その関の戸の夜も明け、かくありがたき夢の告げ、覚むるや名残りなるらん、覚むるや名残りなるらん

11　終曲

三輪明神が岩戸での神遊を再現し終えるとはやくも夜明けとなり、玄賓は濁世の塵に交わって衆生を済度しようという明神の夢のお告げが覚めるのを惜しむ。

明神　天の岩戸を閉じて、大神がその中に姿をお隠しになったので、この世はたちまち昼も夜もない常闇の世界になってしまったのです。多くの神たちは岩戸の前でこのことを嘆いて、神楽を奏して舞をお舞いになったところ、天照大神が岩戸をすこしお開きになったので、常闇の雲がふたたび消えて、日月の光が差してきて、人々の顔が白くみえました。そこで、神々が「ああ、面白い」と声をあげられたのです。これが霊妙な神代のはじめの物語です。

思えば、伊勢と三輪とは本来は一体で、それが分かれたものであることは、いまさら言うまでもないことである。その岩戸が開いたように、夜も明けてきた。それによって、このようなありがたい夢のお告げもさめてしまうかと思うと、玄賓は大いに名残り惜しく思うのだった。

『三輪』鑑賞のために ― 詞章・現代語訳についてのメモ

◆ 詞章は現行の観世流、ワキの詞章は下掛り宝生流のものです。
◆ 詞章冒頭の〔上ゲ歌〕〔一セイ〕〔サシ〕〔問答〕などは、当該箇所の曲節の名称、【次第】【一声】【出端】は登場楽の名称です。また、〔□〕は類型的ではない節を仮にこの形で表したものです。
◆ 詞章で〈〉が付された箇所は韻文のフシ、「」が付された箇所は散文のコトバです。
◆ 掛詞と認められる箇所にはもうひとつの意味を左肩に漢字で小さく記しています。
◆ 詞章に「地」とされている部分は、戯曲上は大別して、
　①シテのセリフ
　②ワキのセリフ
　③叙事文（小説で言えば「地の文」）
　の三種があるので、現代語訳にさいしては、そのいずれか判断して訳しています。
◆ 本日の小書「白式神神楽」になると、**8** のアミ掛け箇所が抜け、「御影」が「神体」に変ります。